

林縁部でケンボナシの果実、ササの葉、ヤマグワの樹皮をよく採食した。

飛驒山系槍ヶ岳周辺に棲息するニホンザルの高山帯への適応についての生態学的研究

泉山茂之（野生動物保護管理事務所）

1989年度の調査は2月から11月までの65日間、1988年度に引き続きラジオテレメトリ法を用いて実施した。4月2日、高瀬川最源流に棲息するYN群（40頭）のオトナメス（9才）をわなにより捕獲、テレメーター発信機を装着した後放し、この個体を追跡することにより群れの追跡を実施した。また本年はSBC信越放送（本社長野市）の協力を得て、ヘリコプターによるロケーションを実施できた。ヘリコプターによるロケーションは5月4日から11月2日までの間合計8回実施した。岩山であり急峻な調査地域において、シャープな2メーター発信波は反射が激しく正確な追跡は熟練を要するが、上空からのロケーションは発信波をダイレクトに拾えるため極めて有効であった。しかし、パイロットの腕に左右されること、危険が大きいことに加え、騒音が大きいため上空からの群れ個体の観察は極めて困難で、群れの一部を観察したのは5月4日の1回のみであった。1988年、1989年度の積雪期の利用地域はそれぞれ2.25km²、2.50km²でほとんど変化がなかった。また、無雪期の遊動が安定する7～9月の利用地域もそれぞれ11.75km²、12.50km²で変化がなく安定している。両利用地域ははっきり分れ、無雪期には積雪期の利用地域を利用することはなかった。

春季の垂直移動期のヘリコプターによるロケーションポイントは6月14日、2,200m付近、6月25日、2,500m付近で、ダケカンバ、ミヤマハンノキなどの萌芽前線と一致し、ゆっくりと新芽を追いながら山を登っていると考えられた。また逆の秋季の垂直移動期の遊動は非常に複雑で9月29日、2,900mから3日後には1,700mに出現、アップダウンを繰り返した後10月21日には2,700mに出現、さらに11月2日には積雪40～50cmの2,550mに出現した。しかしこの後11月14日には積雪期の利用地域に戻り、冬芽、樹皮などを採食する冬の生活に入っていた。

YN（槍ヶ岳）群の群れサイズは1987年42頭、1988年37頭（+αあり）、1989年40頭とほとんど

変わっていない。槍ヶ岳から東方の亜高山帯以上の高山域には高瀬川籍の本群の他に中房川籍、烏川籍、梓川籍の3群が出現し、今後これらの群れの関係について研究を進めて行きたい。

下北半島西北域におけるニホンザルの生息環境と地域個体群の動態

森 治（下北野生生物研究所）
和田 久（第一田名部小学校）

下北半島西北域のニホンザルは奥戸川流域を中心として遊動するM群、その東側、易国間川から大沢目沢にかけて遊動するI群、M群の南側、材木川から古佐井川の焼山沢にかけて遊動するZ群、それにM群の遊動域内の小さな群れAr群が知られている。

今年度はこのうち、I群とZ群について生息環境と群れの動きについて調査した。

（1）I群について

かつてI群は易国間川の本流およびその支流を利用していましたが、数年前より遊動域が東へ拡大し、大沢目沢に達した。これに先行して易国間川の小川目沢にそって林道が開設され、伐採が進められていた。この群れは一時、それを疑う現象もあったが、今年度の調査で分裂が確実となった。

（2）Z群について

この群れもI群とほぼ同じ時期に遊動域が拡大し、分裂し、現在では、ひとつの群れは、かつての遊動域のより人家に近い地域を利用し、他の群れは山地の奥の地域を南側に利用域を拡大している。

（3）不明の群れ

これまで40年ほどにわたって群れの情報のなかった大畑川の上流で、一昨年秋に群れ目撃の情報があった。その後の調査で昨年1月、群れの観察例（和田）があり、今年2月に食痕による群れの移動跡の観察（森）があった。

昨年春の食痕調査により、この群れがI群に起因するものではないことが確かめられたが、Z群の分裂群か、全く新しく発見されたものかは不明である。

（4）環境条件と利用域の変化

I群とZ群の遊動域の拡大、分裂に基本的に作用しているのは森林伐採による環境変化であるこ